別紙２

『神経変性疾患に対する侵襲的換気補助療法時の低量持続自動吸引システムの効果と課題』

お知らせ

１．実施目的について

当院は重度の障がいを持つ患者さまに医療を提供する施設であり、多くの気管切開下補助換気療法（TPPV）を受けている方を診ています。このような方では、肺の感染を繰り返したり、頻回に吸引処置を行うことが、生活の質（QOL）を低下させることにつながるとされています。

このような問題を解決する方法のひとつとして、2010 年 8 月に専用気管カニューレと低量持続吸引器を組み合わせて行う自動吸引システム（自動吸引）が認可されました。当院でもこの自動吸引を 2012 年から導入し効果を確認しています。

今回、自動吸引を用いることが具体的にどのような方にどのような効果をもたらし、導入や使用でどんな課題があるかを調べて、より安全で質の高い医療を提供する基礎資料とします。

２．実施内容について

方法は、2012 年から 2017 年 3 月末までに当院に入院された患者さまのうち、自動吸引導入を試みた方の診療記録を調べ、その方の年齢・性別や病気の状態と症状の経過、呼吸・栄養状態、その後の経過についてまとめ、その傾向を分析します。

カルテを実際に調べる作業を行う期間は、これより 2017 年 12 月末までです。

３．研究代表者

駒井 清暢 （医王病院院長 診療部・神経内科）

４．調査対象期間

2006 年1月1日から 2017 年 3 月 31 日までを調査対象期間とします。

５．個人情報およびプライバシーの保護について

それぞれの患者さまの個人情報は、個人が特定できないデータに変換された上でデータファイルが作成保存、分析されます。この研究により個人情報やプライバシーの漏洩や公開は生じません。

この研究の成果は、個人が特定できないデータとして学術的な場でのみ公表します。

６．本研究に関するお問い合わせ

上記のように個人情報やプライバシーを保護した状態であっても、調査対象となることを拒否される場合や、この研究についてご質問がある場合には、下記までお問い合わせください。

国立病院機構 医王病院病院長　　駒井 清暢